

六篠会報

第 8 号

発行
神戸市灘区六甲台町一
神戸大学農学部内
六篠会
(神戸大学農学部同窓会)

印刷/明光印刷



神戸大学創立 九十周年記念事業について

六篠会会長 西川 欣一

六篠会員の皆様、益々ご
壮健にて活躍のことと存
じます。平成元年十一月一
日付、「六篠会報」第七号
で「開学四十周年に当って」と
題して新制神戸大学四十
周年記念式典のことをご報
告しましたが、一年後の第
八号でいきなり「創立九十
周年記念事業」についてお
知らせすることは、きつと
四十年と九十周年の関係
はいつたようになっている

のかと疑問に思われると存
じます。ここにその間の事
情をご説明すると共に、あ
らためて皆様のご協力をお
願ひする次第です。
神戸大学は、昭和二十四
年の戦後の学制改革により、
神戸経済大学を中心に神戸
工専、姫高、県内の四つの
師範学校を統合し、経済・
経営・法・工・文理・教育
の六学部と教養部を設置し、
その後文理学部から文学部

と理学部が分離し、さらに
神戸医大(医学部)と兵庫
農大(農学部)を統合して、
現在の十部局をもつ総合大
学となりました。しかし神
戸大学は長い間、学部間の
色々な面での差異間から、
なかなか全学一体化の方向
がむづかしく、創立三十五
周年までは各学部毎に学部
同窓会が後援して個別に記
念事業を実施してありまし

た。
しかし、開学四十周年式
典は新野前学長のご尽力も
あって、ようやく機が熟し
平成元年五月に全学を一本
化した式典を挙げることに
出来ました。
このように神戸大学全学
一体化への気運の盛りあが
りから、十年後の新制神戸
大学五十周年記念事業とい
う形でなく、東京大学や早
稲田大学など多くの大学が
行なっているように、新制

大学という学制改革の昭和
二十四年からの起算でなく、
神戸大学高等教育機関とし
ての前身校の設置から起算
してはどうかという提案が
部局長会議でなされ、去る
平成二年九月二十日に学長
招集による神戸大学各学部
同窓会代表者会議がもたれ、
前学長より概略次のような
お話しがありました。
「私は学長就任以来、神
戸大学を可能な限り一体化
の方向へ前進出来ないかと
考え努力してまいりました
が、幸いにして皆さんのご
協力により神戸大学はたに
受験生の偏差値だけが高
くなっただけでなく、内容
的にも充実し、一体化の意
識を高めることが出来て、
去る五月には新制四十周年
式典とその祝宴を挙げるこ
とが出来、開学五十周年
への目処もたちました。こ
うした時に部局長会議にお
いて、この際五十周年の起
算を、神戸大学の高等教育
機関としての前身校の設置
時点からにしてはどうかと

云うご提案がありました。
ご承知のように、本学の
最も古い前身は教育学部の
兵庫教育伝習所ですが、こ
れは中等教育機関でもあり、
高等教育機関としての創立
時期を神戸大学全体の創立
時とするならば、神戸経済
大学の前身の神戸高商の設
置が明治三十五年で平成四
年には創立九十周年となり
ます。
しかし、この問題を将来
にわたって疑義の生じない
ようにするため教育学部並
びに同窓会である兵庫教友
会にご相談したところ異論
がない旨をご連絡頂きまし
たので、今日ここに全学同
窓会代表の方々にご参集を
願って以上の経過について
ご報告をして、皆さんのご
了承を得たいと存じます。」
この会に六篠会からは代
表として小生が出席し、全
会一致で了承した次第です。
従って、これにより年史に
ついては「神戸大学一〇〇
年史」となり、また募金活

動については「神戸大学創
立九十周年記念事業」とし
て文部省へ申請認可後実施
されることとなりました。
以下に私の知る範囲内で
九十周年から一〇〇周年への
記念事業の概要を記します。
一、神戸大学一〇〇年史の
刊行
神戸大学一〇〇年の歩み
を回顧し、将来への展望を
得るために「神戸大学一〇
〇年史」を企画し刊行する。
すでに一〇〇年史編集委員
員会が組織され、農学部か
らは小生が委員をつとめて
おり、専任の一〇〇年史編
集室も大学本部に開設され
ています。さらに年史編に先
だつ一〇〇年史紀要の第一
号が目下編集中です。
二、国際交流基金の設立
現在神戸大学では、十七
の外国の大学等と交流協力
を締結し、研究・教育の相
互的な国際学術交流が行わ
れていますが、今後共賞・
量両面にわたって強化して
いく必要があります。そこで
国際交流基金を創設して、

これを財源として人的交流
を促進し、かつ、外国人研究者
との共同研究・シンポジウム
の開催等の事業を行なう。
独自の基金のない農学部の
場合、若手教官を中心に留
学や国際会議出張等多くの
メリットが期待されます。
三、神大会館(仮称)の建設
神大会館の建設は、国際
交流基金の設立とあいまつ
て神戸大学の国際学術交流
を一段と円滑に行われ、そ
のシンボルとなるものです。
平成四年が創立九十周年
に当たり、九十周年から一〇
〇周年にむけて先ず募金活
動のための後援会組織の充
実から始められるものと思
います。
今後共、神戸大学農学部
の一層の充実発展のために
卒業生の皆様の絶大なご協
力をお願いしつつ、「神戸大
学創立九十周年記念事業」
についての会長挨拶とさせ
ていただきます。

六篠会員各位のご健康と
ご多幸を心よりお祈り申し
上げます。
われです。(一)食糧生産に関
係する分野、(二)バイオサイ
エンスに関係する分野、(三)
環境に関係する分野、の三
分野がそれに当たります。又
各学部に対するのと同様、
情報処理教育、システム科
学などソフトの分野の教育
が要求されています。この
ような各分野は、従来から
本農学部関係者が教育研究
対象としてきた分野であり、
本質的に大きく変わったとは
考えられないのであります。
が、時代の変化に対応した
より良い教育研究組織及び
内容に改善整備することが
必要となっているわけであ
ります。
特に、科学技術の進歩は
非常に急速であり、今日脚
光をあびているものも十年
を経ずして古くなる、別の
ものに取って代わられるとい
う状況です。従って本農学
部を今後卒業していく諸兄
は社会での数十年にわたる
活動期間中に、幾度となく
多方面での変化に遭遇する
害であり、これらの変化か
らもたらされる多様な問題
に対処しうる十分な知的・
技術的ポテンシャルを在学
中に養成することが必要と
なるわけであり、この
ため幅の広い基本的な科学
知識の修得が望まれています。
学部改組の主目的の一
つが上述の幅広い基礎学力
のある人材を養成しうる組
織を作ることであり、新し
い学部の組織が従来の組織
より講座数の多いものが考
えられている大きい理由で
あります。
大学が教育機関であるば
かりでなく研究機関である
ためには、学問研究の継承
と発展深化及び後継者の育
成が極めて大きい課題であ
ります。特に応用科学であ
る農学の各分野では純粋理
学の分野と異なり、経験的
知識も極めて重要であり、
又ある意味では徒弟的とも
いえる実際の訓練も必要で
あることは古くからよく認
識されているところで、実
学において体験を通じての
技術や知識の修得が如何に
大切であるかは多言を要し
ないところであります。このよ
うな理由から各学科の人的構
成も考えられており、他大
学で多く見られる逆三角形
の教官の配置はとらないよ
うに考えられています。
以上筆者の私見ですが、神
戸大学農学部の改組に對す
る基本的考えであり、現在
このような考え方によって
改組案が検討されています。
農学部改組は極めて困難
な問題であり、多くの難点
を克服しなければならぬ
ことは容易に推測できます
が、学部全教官の意向を結
集して、立派な農学部を作
り上げたいと願ひしていま
す。六篠会々員の各位にお
かれます。母校のため
一層の御支援御鞭撻のほど
お願い申し上げます。最後
になりましたが、会員皆様
の御健勝と一層の御活躍の
ほどを心よりお祈りいたし
ます。



▲ 神戸大学農学部 (航空写真)

昨年からはじめた歴史の
激動の中で一九九一年を迎
えましたが、六篠会会員の
皆様方には社会の広い分野
で益々御活躍の様子を拝察
し心よりお慶び申し上げた
いと存じます。
昨年九月より名武昌人先
生より学部長の職を引継ぐ
ことになり、ようやく半年
を過ぎようとしています。本
会報の紙上をかりまして、会
員の皆様方に学部近況の報
告がたがた御挨拶申し上げ
ます。
神戸大学農学部は創立以
来四十一年目を迎えており
ますが、その間県立より国
立への移管という第一回目
の大変革を経て今日の発展



会員の皆様へ

農学部長 尾崎 叡司

をとげているのであります
が、それより二十年余を経
た今年、又第二回目の大変
革の時を迎えております。
近年の科学技術の急速な
進歩及び経済・社会の激し
い発展変化に伴って、大学
農学部に対する社会のニ
ーズも変化し、このような社
会状況の変化に対応すべく、
全国国立大学農学部の改組
が行われてきており、新制
大学農学部(旧制大学では
一部で進行中)では、神戸
大学及び高知大学を残して
改組が完了しており、我が
農学部も好むと好まざるに
拘らず組織の見直しをせ
ざるをえない状況になって
おり、文部省からも改組を
求められています。このよう

な状況に対応すべく、神戸
大学農学部においても、学
部組織運営検討委員会及び
同専門委員会において鋭意
改組案の検討が行われてい
ます。神戸大学では教養部
を初めとして、文学部、教
育学部、理学部及び工学部
でも時代に即応すべく改組
が検討されており、これら
の改組の一環として農学部
も全学的関連のもとに改組
を実施するよう大学当局か
ら求められています。勿論
他からの要求によつて、学
部の刷新を行うのではなく、
本農学部が自主的に社会・
経済の変化、科学技術を含
めあらゆる分野の進展の方
向を見極めて農学部自体を
改革していかなければなら

ないのは当然のことであり、
現在そのための努力がはら
われているわけであり、
一般的に考えられている
農学部の改組の方向は、今
後の社会が農学部が担す
べきであるとしている教育
研究分野を対象として、非
常に激しく発展変化する状
況に十分に対処できる人材
を養成しうる組織を作ること
であります。この場合農
学部の分担すべき教育研究
分野は斯く斯くの範囲であ
るという固定された限界は
無い筈であり、又このよう
な限界を設けるべきではあ
りませんが、文部省などで
一般的に考えられている農
学部の分担分野は大別して
次の三つに分けられると思

われです。(一)食糧生産に関
係する分野、(二)バイオサイ
エンスに関係する分野、(三)
環境に関係する分野、の三
分野がそれに当たります。又
各学部に対するのと同様、
情報処理教育、システム科
学などソフトの分野の教育
が要求されています。この
ような各分野は、従来から
本農学部関係者が教育研究
対象としてきた分野であり、
本質的に大きく変わったとは
考えられないのであります。
が、時代の変化に対応した
より良い教育研究組織及び
内容に改善整備することが
必要となっているわけであ
ります。
特に、科学技術の進歩は
非常に急速であり、今日脚
光をあびているものも十年
を経ずして古くなる、別の
ものに取って代わられるとい
う状況です。従って本農学
部を今後卒業していく諸兄
は社会での数十年にわたる
活動期間中に、幾度となく
多方面での変化に遭遇する

害であり、これらの変化か
らもたらされる多様な問題
に対処しうる十分な知的・
技術的ポテンシャルを在学
中に養成することが必要と
なるわけであり、この
ため幅の広い基本的な科学
知識の修得が望まれています。
学部改組の主目的の一
つが上述の幅広い基礎学力
のある人材を養成しうる組
織を作ることであり、新し
い学部の組織が従来の組織
より講座数の多いものが考
えられている大きい理由で
あります。
大学が教育機関であるば
かりでなく研究機関である
ためには、学問研究の継承
と発展深化及び後継者の育
成が極めて大きい課題であ
ります。特に応用科学であ
る農学の各分野では純粋理
学の分野と異なり、経験的
知識も極めて重要であり、
又ある意味では徒弟的とも
いえる実際の訓練も必要で
あることは古くからよく認
識されているところで、実
学において体験を通じての
技術や知識の修得が如何に
大切であるかは多言を要し
ないところであります。このよ
うな理由から各学科の人的構
成も考えられており、他大
学で多く見られる逆三角形
の教官の配置はとらないよ
うに考えられています。
以上筆者の私見ですが、神
戸大学農学部の改組に對す
る基本的考えであり、現在
このような考え方によって
改組案が検討されています。
農学部改組は極めて困難
な問題であり、多くの難点
を克服しなければならぬ
ことは容易に推測できます
が、学部全教官の意向を結
集して、立派な農学部を作
り上げたいと願ひしていま
す。六篠会々員の各位にお
かれます。母校のため
一層の御支援御鞭撻のほど
お願い申し上げます。最後
になりましたが、会員皆様
の御健勝と一層の御活躍の
ほどを心よりお祈りいたし
ます。

六篠会代議員制への移行について

六篠会幹事長 新家 龍

一九九一年を迎えて、六篠会員の皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。昨年は新制神戸大学40周年記念号として六篠会名簿(平成元年版)を発行し、会員の皆様にお届けしましたが、諸般の事情で発行予定から大変遅れて多大のご迷惑をかけたことを恐縮して、この次第です。

六篠会会則

1、総 則

第1条(名称) 本会は神戸大学農学部六篠会と称する。

第2条(目的) 本会は会員相互の連絡を密にし親睦をはかることを目的とする。

第3条(事業) 本会はその目的を達するため名簿の発行その他必要な事業を行なう。

2、組 織

第4条(会員) 本会は下に掲げる各項目のいずれかに該当する会員で組織する。

①正会員

イ、旧兵庫農科大学を卒業したものの

ロ、旧兵庫県立農業短期大学を卒業したものの

ハ、神戸大学農学部を卒業したものの

ニ、神戸大学大学院農学研究科を修了したものの

②特別会員

イ、旧兵庫農科大学に勤務していたものの

ロ、旧兵庫県立農業短期大学に勤務していたもの

ハ、神戸大学農学部勤務していたもの

ニ、神戸大学農学部勤務しているもの

③準会員

イ、神戸大学農学部に在学するもの

ロ、神戸大学大学院農学

研究科に在学するもの

④名誉会員

本会に功績があり、役員会の推せんをうけたもの

⑤賛助会員

本会の主旨に賛同し、本会へ入会を申し出たもので役員会の承認をうけた個人および団体

⑥役員

第5条(役員) 本会に次の役員をおく。

会長1名、副会長若

干名、常任幹事若干名、幹事若干名、監事2名

第6条(選出)

①役員は卒業学科ごと、および鶴岡会の正会員の中から数名の候補者を推せんし役員会において決定する。

②会長は正会員の内から役員会において決定する。

③副会長および監事は役員の内選による。

④常任幹事は役員の内から会長が委嘱する。

⑤役員の内前項に定める役職以外のものは幹事とする。

第7条(任務) 会長は本会を代表し会務を統括する。副会長は会長を補佐する。常任幹事は会務を分掌し、監事は財務を監査する。

第8条(任期) 役員の内任期は1ヶ年とし毎年4月に交代するものとする。ただし留任を妨げない。

第9条(招集) 会長は定期役員会を毎年4月に開くものとする。このほか会長が必要と認めるとき、役員4名以上または正会員の30名以上の要請があった時は臨時役員会を招集しなければならない。

第10条(会務) 次の事項は役員会の議決を要する。

①事業計画

②予算および決算に関する事項

③会費に関する事項

④寄付金その他収入に関する事項

⑤名誉会員の推せん、特別会員および賛助会員の承認

⑥会則の変更

第11条(表決) 役員会は役員の内過半数の出席により成立し、議事は出席議員の内過半数で決する。可否同数の時には議長が決定する。

第12条(招集) 役員会が必要と認めるとき、会長が招集する。

第13条(議長) 議長は正会員中より選ばれ、総会の議事をまとめる。

第14条(表決) 総会の議事は出席正会員の過半数で決する。可否同数の時は議長が決定する。

第15条(議決事項) 次の事項は総会の議決を要する。

①会則の変更

②その他役員会が総会の議決を必要と認めた事項

第16条(経費) 本会の経費は会費、寄付金、その他の収入をあてる。

第17条(会費) 会員は役員会の定める会費を納入するものとする。

第18条(会計年度) 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第19条(監査) 本会の会計については監査を行うものとする。

7、附 則

①本会の本部事務所は神戸大学農学部内におく。

②本会則施行に際しての細則は必要に応じて役員会によりこれを決める。

③本会則は昭和50年11月23日より施行する。

県六篠会のその後

県六篠会会長 森 俊 人

兵庫農科大学の第一回卒業で、兵庫県職員第一号として、長い間お勤めいただいたてまいりました前県六篠会長の田中平義大先輩が偉大な業績を残されて、昨年の春、ご退職されました。引き継ぎの会の席で、田中大先輩の言葉を、ドリルから砕岩機の先端のように働かれたと例えさせていただいたのを思い出します。

第一回生、県職第一号と云う大変な重圧と大切なお立場で常にご苦労いただいた

ておりましたが、大先輩は持ち前のソフトスマイルをくすくすことなく、つねに、私も後輩の歩むべき道を拓きつづけられました。紙面をお借りして、大先輩に感謝と敬意を表します。

昭和三十一年の春、スルメとコップ酒で歓迎していただいたのが県六篠会の始まりであったのかと過日日を回想しております。

開学以来四十余年が過ぎ、六篠会員も五千名に及ぶことを耳にして、まさに、今

昔の感懐としおであります。教職員以外で兵庫県に勤務する六篠会員で構成する当会員も、三名のOB会員を含め、一五六名を数え、全六篠会員の約三・一％に上っております。

東の間であったように思いますが、当時は「もはや戦後ではない」と云われながら、一万円にはるかに及ばない初任給で、食料の確保こそが第一の使命でありました。この間、社会は変化し、経済は成長して、グ

ルメプームにわく飽食の時代が到来し、価値観に大きな隔りを感じるものの、優秀な後輩諸氏が第1図に示すように、世相をよく反映しながら県職員になっております。

専攻学科別の会員数をみると、表1に示しますように、農大時代と神大時代とあまり変らない学科もありますが、農芸化学科の減少がみられるのは、兵庫県の職員採用試験のあり方に関係があるとも考えられます。

に始まり、翌年3月31日に終る。

第19条(監査) 本会の会計については監査を行うものとする。

の時には議長が決定する。

第15条(議決事項) 次の事項は総会の議決を要する。

①会則の変更

②その他役員会が総会の議決を必要と認めた事項

第16条(経費) 本会の経費は会費、寄付金、その他の収入をあてる。

第17条(会費) 会員は役員会の定める会費を納入するものとする。

第18条(会計年度) 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第19条(監査) 本会の会計については監査を行うものとする。

の時に議長が決定する。

第15条(議決事項) 次の事項は総会の議決を要する。

①会則の変更

②その他役員会が総会の議決を必要と認めた事項

第16条(経費) 本会の経費は会費、寄付金、その他の収入をあてる。

第17条(会費) 会員は役員会の定める会費を納入するものとする。

第18条(会計年度) 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第19条(監査) 本会の会計については監査を行うものとする。

の時に議長が決定する。

第15条(議決事項) 次の事項は総会の議決を要する。

①会則の変更

②その他役員会が総会の議決を必要と認めた事項

第16条(経費) 本会の経費は会費、寄付金、その他の収入をあてる。

第17条(会費) 会員は役員会の定める会費を納入するものとする。

第18条(会計年度) 本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第19条(監査) 本会の会計については監査を行うものとする。

園芸農学科からの志望者が多く、表示していませんが神大の育種卒業生は十七人と特異的であり、第2図にみられるように各分野の割合で、新しい世紀を目前に、ここから豊かな兵庫県の実現を目指して、それぞれの立場で大いに活躍しております。

これまでの「科学技術の進歩」による効率の追求時代から、「生活文化の充実」による心の時代へと移っておりますが、これからの時代は「慈愛に満ちた社会」が求められると云われております。六甲山麓で農学という応用科学技術部門を専攻したものの、それにこだわることなく、こうした時代の要請に応じてそれぞれ

の分野で適性を発揮し、県政推進に貢献している様をみて、草創期を知るものにとつて、まことにうれしくまた、心強いかがりであります。

同一職場の同窓の増加は派閥的色彩が強めがちでありますが、私情をはさまない連携の強化につながることを切望するとともに、OB会員にとつて替る優秀な後輩諸氏の仲間入りによって、県六篠会員の深みない新陳代謝が続きますよう祈っております。

なお、県六篠会の総会は定例的に毎年五月第三土曜日に開催いたします。

図1 卒業回次別会員数

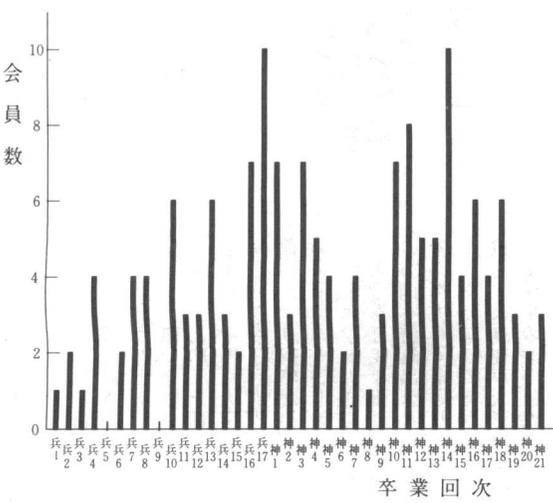
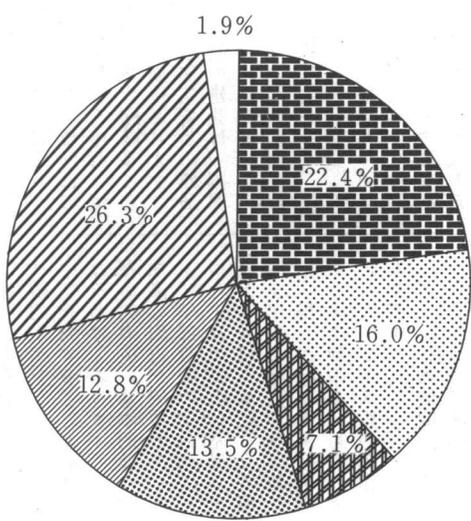


表1 学科別会員数

学 科	農 大	神 大	計
園 芸 農 学 科	21	43	64
植 物 防 疫 学 科	5	20	25
農 業 工 学 科	10	21	31
農 芸 化 学 科	16	6	22
畜 産 学 科	6	8	14
計	58	98	156

図2 県六篠会員の所属別割合



KOBE六篠会五周年

KOBE六篠会会長 中谷吉実

KOBE六篠会の第五回総会を、平成二年の二月十二日に神戸・三ノ宮の金龍閣において開催いたしました。

当日は、名武前農学部長をはじめ、水野進、山本修、西村功、畑田淳の諸先生方と六篠会本部から西川会長、新家幹事長が来賓として御出席いただき本会に花を添

えていただくことができませんでした。KOBE六篠会は神戸市役所及び市立高中小学校に勤務する職員・教職員等で構成し、昭和61年に発足して以来会員は膨れて現在は85名となっております。今回の総会においては、本会の発足にあたりお骨折りをいただいた鍋山会長が



▲ KOBE六篠会第5会総会にて

退職・退任されるとともに役員の任期満了に伴う新役員の選任を行いました。新役員は会長に中谷吉実（農大四回、緑農開発公社）、副会長に平山国治（同一回、摩耶兵庫高校）、小山美幸（同一回、土木局）が、監事に酒井修（同一回、住宅局）、宮崎直道（同一回、本山中学校）、杉本龍秀（同一十三

神戸共同研究開発センターについて

センター長 藤井 聡

回、衛生局）が、さらに幹事に古家、齊藤、西尾、木股、中村、岡、菅原、橋本、渋谷、高谷が選ばれました。また、先生方からは大学の近況や研究活動の内容のほか神戸大学全学五十年周年記念行事に向けての取組みの考え方などの紹介がありました。そして、総会に続く懇親

の席では良き学生時代を懐かしみ、それぞれの職場での苦労話に花が咲き、時の経つのも忘れて会員相互の親睦と先生方との交流の輪が広がりました。今後はさらに、会員の連携を密にして公私にわたりの親睦と情報交換を行い、助け合っていくことが必要であり、また「大学に助けら

れ、大学のためにお世話できる」そんな会に発展させたいと考える次第であります。また、最後になりましたが、本会の有志が集まり、兵庫県庁や尼崎市役所に勤務する同窓生とも交流が進んでいることも併せて報告させていただきます。



平成2年度技術者養成研修

品関係のものであります。ここでカッコ付の共同研究と書きまされたのは理由があります。「共同研究」は民間等から研究者及び研究経費等を受け入れて、大学側も民間等と共通の課題について共同で研究するものであります。従って普通に云われる共同研究ではありません。「共同研究」には民間の負担する研究費の額によりABCの三つの種類があります。センターはこの「共同研究」を実施すること、もしセンターで処理できぬ場合は申込まれた課題に応じた専門の教官を紹介すること、派遣研究員の研究の場所を確保すること等が任務となっております。他大学でも「共同研究」の実現には仲々至らず、他の方法たとえば受託研究とか奨学金の寄附等になって了うことが多いのです。そこで昨年夏には、こうベテクノサロンという産官学からなる技術交流懇話会と合同で、「共同研究の可能性をさぐる」というセミナーを開催しました。その席で産学双方から問題点が提起され、お互いにその解決にむけて努力することになりました。たしかに、成果の発表の問題とか、手続の複雑さとか、研究費の額の問題を持つていけばわからないとか色々問題があるので

が、この様なときにセンターが仲介の労をとれるのではないかと考えております。更に2年度には民間の技術者を対象に技術者養成研修「バイオテクノロジークурс」を開講しました。3年度も開講の予定です。このように本センターは農学部主導という特色を生かした運営を今後も行いたいと思っております。斯界でご活躍の皆様のご支援とご鞭撻をお願いします。所以であります。

湾岸戦争で思ったこと

農業経済学講座

加古 敏之

湾岸戦争が多国籍軍の圧倒的勝利のうちに二月二十八日に実質上終結した。新聞やテレビでクエート市民の喜ぶ姿が報道されるのを見ると、嬉しさがこみ上げてくる。今回の湾岸戦争は、ベトナム戦争の様な長期戦が懸念され、また、多国籍軍側の大きな犠牲もありうるといふ予想に反して、なんとなくあつけないイラク側の敗戦だった。これはアメリカを中心とする多国籍軍のハイテク兵器の優秀さや、長期間にわたる空爆の効果が大きかったと伝えられている。捕虜になれたことで安心して笑みさえ浮かべているイラク軍人の映像を見ると、戦意は相当低下していたことが想像される。土気低下の一つの理由は、国連決議に基づく経済封鎖の効果が上がったためといわれる。とりわけ前線の軍隊の食糧不足はかなり深刻なようだった。イラクの食糧自給率は低くアメリカ合衆国等から多くの食糧を輸入していた。例えば、イラクはアメリカ合衆国の米輸出国の中で最大のシェアを占めており、一九八九年にアメリカ合衆国の米輸出量の一八・八％、五四万トンの米輸入を行っていた。これはこの年に限ったことではなく、イラクはアメリカの最大の得意先である。イラクのクエートへの侵攻以来経済封鎖により食糧輸出は中止され、米の輸出も中止された。こうした経済封鎖がボクシングでいうボデー・ブローの様になり、イラク軍の士気を低下させたことがうかがえる。降伏したイラク兵に食糧が配られると、食糧に飛びつく姿を見ていると、よほど食糧事情が悪かったことが想像される。戦争が行われた理由はともかくとして、豊臣秀吉もよく使った俵糶責めという古くから使われてきた方法が今回も使われた。ソ連のアフガニスタン侵攻の際にもアメリカは制裁措置としてソ連への農産物の輸出を禁止した。食糧を武器として使うことの有効性はその時々状況により異なるであろうが、アメリカは将来も食糧を武器として使うであろうというところが今回改めてはつきりした。世界のパン籠のアメリカにとって、食糧を武器にすることはそれほど大きな困難を伴うことなく実行できるのである。今回の戦争を通じて、日本人の多くは有事の際の食糧の安全保証の重要性を改めて認識したのではないだろうか。戦争をしないことが一番賢明であることはいうまでもないが、有事の際にも安定して食糧が確保できる仕組みを作ることが大切であろう。食糧輸出国との長期契約の締結やできるだけ食糧の輸入先を分散することも一つの対策であろう。また、日本の国土を有効に利用して、基礎的食糧をできるだけ国内で供給する体制を確立することも重要であろう。将来、人口爆発で地球規模で食糧不足が発生した場合、国土相応の食糧を生産することが日本人の責任として要求される日もくるのではなからうか。モンスーン地帯に位置する日本では長い伝統のある水田農業の生産性を向上させ、米利用の多様化を図ることがやはり重要であろう。このことが日本ができる地球に優しい食糧生産といえよう。日本の農産物輸入量の六割が荷揚げされるという神戸港を研究室から眺めながら、日本農業の国際化と食糧の安全保証をどうしたらいいかを考えてみたい。こういうテーマを研究するには大量の輸入農産物が陸揚げされる港の近くに位置している神戸大学農学部は最も立地条件が良いように思われる。



カリフォルニアからの便り

果樹園芸学講座

河合 義隆

一昨年の十月より在外研究員として十ヶ月間カリフォルニア大学デービス校に滞在した。日米貿易問題、オレンジの自由化が決まり、日本のみかん農家にとつては打撃的な問題となった。また、米自由化の要求も突きつけられた状態であり、自由化の波に日本の農業がどう対応していけば良いのか深刻な時期であったので、そのことを念頭において出かけて行った。

カリフォルニアは全米の約10%の農業生産高を占めており、農業は州の重要な産業である。サクラメント川の周りでは、カリフォルニア米が栽培されており、その水田が地平線まで続いていた。カリフォルニア大学デービス校はカリフォルニア州立大学九つのうちの二校であり、農業の方面では優秀な大学である。スタッフの一人は、デービス校

はオハイオ州立大学やコネル大学などに次いで入学が難しいが自分の息子は頑張ったと自慢していた。アメリカの入試のシステムを知らない私にはピンと来なかったがとにかく大変なであろう。一方、入学してからがさらに厳しいというところは日本に居るときから聞いていたが、こちらの学生がよく勉強する姿勢には、大いに刺激を受けた。とにかくキャンパスのいたる所で学生が勉強しているのが目についた。図書館、ロビー、廊下、喫茶店、芝生etc.....

図書はいつ入っても込んでおり、隅の方に席を求めたこともあった。また、夜はすいていと思うと入ってみると夕方よりも込みだしてることがあった。ちなみに図書館は夜中の十二時まで開いている。日本の大学においては、

六篠会も、発足以来十八年目を迎え、会員数も増え、益々発展充実しています。このことは、誠に喜ばしいことと存じます。その間、会長を始めとして会員皆様方のご尽力で、会員間の交流、親睦を深めるための名簿作成、諸行事開催等と実績を挙げられたことにあります。

現在においては、会員の層も厚くなり、幅広い分野で活躍され、六篠会も過去から未来へと無事歴史を刻んでおります。しかし、今後の六篠会に期待されるべきことは、今日の国際社会での時代の流れに対応すべく若い層の役員会等への参画並びに他学部との同窓会との連携を十分に保ちながら、より発展充実を計ることが必要ではないでしょうか。さて、今回同窓会会報を依頼されたのを機会に、KUCの概要説明と入会PRをさせて頂くことにします。

KUCは、神戸大学クラブの略称で学友会の一組織として、神戸三宮の神戸新聞会館八階に本部を置き、会員の親睦の場として利用されています。KUCは、七年前に神戸大学全学部（九学部）及び教職員の親睦、

れないが、大学の教員や研究設備の充実が注がれていないことにも原因がある様である。とにかく現状としてはアメリカの大学生の方が良く勉強している印象を受けた。「神戸大学農学部の学生よ。アメリカの大学生に負けるな」と叫びたくなった。実を言うと、アメリカの大規模な農業を目の当たりにしたのと農作物をいかに安く供給するかを真剣に考えている立場に恐れ入ったからである。

しかし、日本の農業がアメリカの農業に負けるかどうか考え方はナンセンスであると思う。農業は食料を供給する大事な基本産業であり、健康に適した質の良いものを絶えず十分に生産するための自然と人間の闘いの場である。デービスから見たカリフォルニアの広大な平野そして雲ひとつ無い澄んだ青空が、私の心の奥底に無限に広がって行った。



▲ 新築された図書館

情報交換、大学の発展に寄与する事を目的として発足しました。組織として運営委員会があり、原則として、隔月一回木曜日夕方に各学部の輪番担当で会合が持たれます。農学部では、西川、新家両先生と私が、各学部との情報交換、KUC運営状況、会員名簿の発行、及び諸行事（講演会等）計画、実施方法等に対する討議の場に出席しています。委員会に出席して感じますことは、他学部の情報を得られること無論ですが、会合後、学部の壁を越えて異種の業界の方々と自由に会話を楽しめることです。凌霄（法、経済、経営）、KTC（工学）等は年配の方が出席されますが、年齢差を感じず和気あいあいの雰囲気、興に乗れば夜中まで話合うこともしばしばあります。

次に、KUC入会の誘いですが、現在の会員数は約千五百名で、凌霄、KTC、医学、教育に続いて、農学部は、八十余名の入会者で、同窓会会員数から見れば少々少ない感じがしないでもありません。KUC会員の方々は、クラブ内で前記の委員会の雰囲気と同様に会

食しながら会話を楽しんでおられます。特に、三宮の夜景を眺めながら杯を交し雑談に耽れば日頃のストレスも解消されるかと思われまます。ぜひ入会され、同窓会及び学部間の交流、親睦を計るため、KUCを利用されることをお勧めいたします。

以上、KUC紹介を兼ねまして入会の勧誘をしましたが、最後に六篠会の益々のご発展と会員皆様方のご多幸をお祈りします。

六篠会平成元年度一般会計決算報告書

六篠会平成元年度学術振興基金決算報告書

原稿募集

- 平成2年度六篠会役員**
- 会長 西川 欣一 (A1)
 - 副会長 東 順三 (C1)
 - 久保 平夫 (C2)
 - 能 宗 康夫 (C2)
 - 常任幹事 新家 龍 (C5)
 - 幹事 寺井 弘文 (A神2)
 - 庶務 三十尾 修司 (A神6)
 - 会計 山形 裕士 (C神5)
 - 名簿 津川 兵衛 (C11)
 - 監事 能 宗 康夫 (C2)
 - 切 貫 武代 (K1)
 - 幹事 中 谷 吉 実 (A4)
 - 山口 禎 平 (C1)
 - 久 下 平 義 (C1)
 - 田 中 平 陽 (A2)
 - 石 田 進 夫 (A3)
 - 前 川 郁 夫 (A4)
 - 鍋 山 聰 久 (A6)
 - 藤 井 義 三 (Z6)
 - 北 浦 康 三 (A7)
 - 氷 上 康 進 (C7)
 - 西 浦 進 一 (A9)
 - 酒 井 一 三 (Z9)
 - 竹 内 正 伸 (C10)
 - 中 田 昌 伸 (C10)
 - 岸 原 士 郎 (Z11)
 - 岡 沢 秀 晃 (Z11)
 - 河 南 保 幸 (Z11)
 - 山 本 博 昭 (A12)
 - 王 子 善 清 (C12)
 - 辻 莊 一 (Z12)
 - 内 藤 親 彦 (A13)
 - 永 吉 照 人 (A13)
 - 高 橋 竹 彦 (C13)
 - 脇 内 成 昭 (C15)
 - 西 尾 司 (Z16)
 - 中 村 直 彦 (Z神1)
 - 山 木 和 人 (T神4)
 - 事務局 江口 庸平
 - KUC運営委員: 西川 欣一、新家 龍、酒井 進
 - 神戸大学KUCプライダル・センター委員: 西川 欣一



C7 酒 井 進

役員会報告

原稿募集

切 貫 武代 司 (印)
久 保 一 兵 (印)